

小学校ベースボール型授業における言語行動分析

－非従事の時間の充実に向けて－

小杉 多音 （ 弘前大学 ）

1. 目的

本研究の目的は、ベースボール型の授業において、児童の間ではどのような会話がなされているのか現状を把握し、教師として児童にどのようなアプローチをしていくことが有効なのか、非従事の時間の充実に向けて検討することである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：H小学校 6 年生 1 組 29 名
- 2) 調査方法：ティーボール全 8 時間の 6 及び 7 時間目の授業をビデオカメラ 4 台及び iPad2 台で撮影を行うとともに、担当教師の発言をボイスレコーダーで録音した。また、事前に担当教師が班を 4 つにグルーピングしており、2 班と 3 班からは野球部に所属している男子児童を、1 班と 4 班からは相対的に運動が得意ではない女子児童を 1 人ずつ抽出し、4 名を抽出児童とした。
- 3) 分析方法：①児童の会話及び発言の分析として、浅川ら（2016）の言語行動分析分類表（以下、分類表）をもとに 18 の分析カテゴリーを作成し、ゲームの準備開始時からゲーム終了時までの撮影で得られた発言を分類した。②教師の相互作用行動分析として、授業開始から授業終了時まで、教師の発言をボイスレコーダーで録音し記録した。

3. 結果と考察

ゲーム時の発言回数は班によってバラつきが見られた。2 班と 4 班は、分類表の項目④「肯定的フィードバック」、項目⑨「励まし・かけ声」の発言回数が多かった。この 2 つの項目が多いほど「応援されている、認められている」という自己有用感や成功したときの達成感や充実感などが高まり、意欲の向上につながると考える。また、リーダー

となる運動が得意な児童がいた 2 班と 4 班は、分類表の項目②「運動前に矯正する指示」、項目③「運動中の指示」の発言回数も多く、仲間のプレイに対するアドバイスやゲームに勝つために話し合いをしている場面が多く見られた。加えて、4 班では運動が得意でない抽出児童が他の児童にアドバイスを求める発言も記録できた。

教師の相互作用行動の記録より、担当教師は「する・みる・支える・知る」という多様なスポーツの観点に触れる発言や、待機時の行動に関して指示を出す発言、リーダーとなる児童に対して自分の役割を自覚させるような発言を多くしていた。このことから、「非従事の時間」において、仲間を応援したり、仲間のプレイに対してアドバイスをしたりする児童が増えていったと考える。

4. 結論

本研究より、班の雰囲気は発言回数や発言内容に大きな影響を与えることが示唆された。非従事の時間の中で、児童同士がより良いコミュニケーションを図っていくために、教師がグルーピングの仕方を工夫することや、競技経験の有無に関わらず運動が得意な児童を各班にリーダーとして配置し、仲間に対する思いやりを持たせることが大切であると考ええる。「する」ことにのみ焦点を当てるのではなく、「みる」「支える」に目を向けた指導を行うことで非従事の時間での発言の質を高めていくことにつながると考える。

5. 主な参考文献

浅川孝太・松本健太・岡田雄樹・針谷美智子・近藤智靖（2016）小学校体育授業における運動技能水準上位児・下位児に関する事例的研究－学習課題・教師・仲間との関わりに着目して－. 日本体育大学スポーツ科学研究, 5 : 1-11.